

「水の都」大阪から台南「烏山頭ダム」へ

近畿経済産業局産業部長 坪田 一郎

東京から大阪に赴任してきて約2年になりますが、淀川やその支流、運河が張り巡らされている大阪は、文字通り「水の都」だと実感する毎日です。単身赴任の気ままな生活、運動不足解消も兼ね、休日はレンタサイクルを含む自転車で色々なところを走るのを趣味としています。大阪だけでなく、関西全体がその古い歴史とともに「水」との親密な関係を築いてきたところだと、しばしば感じているところです。(先日も「一庫^{ひとくら}ダム」を見て参りました。)



大阪天満 川崎橋から毛馬桜之宮公園

近畿経済産業局は、工業用水を担当しているところですが、我が国で初めて工業用水が敷設されたのも、兵庫県高砂町(現高砂市)とのことです(大正11年)。

また、関西は地勢的・歴史的に、古くからアジア各地との往来が盛んな地域でもあり、最近は円高が緩和してきたこともあり、京都や奈良をはじめ、大阪の街にもアジア各国から大勢の観光客が再び訪れるようになってきました。

そんな中、友人(水資源機構職員)との雑談の中で、

先の東日本大震災に際して、200億円にもものぼる義援金が台湾から日本に送られてきた不思議に気づきました。いくら親日的とはいえ、その額は突出していて、2位のアメリカの倍以上、韓国からの10倍以上もあり、どう考えても、ただ親日的だけで済まされる話ではなさそうに思えました。そもそも、台湾はなぜ親日的なのか?と考えると、様々な憶測はできるものの、正確な答えは浮かんでこないのも不思議と言えば不思議。(台湾は、人口約2300万人、面積36000平方キロで、九州よりやや小さいくらいの規模です。)

その友人との話では、その大きな鍵が、台湾南部の嘉南平野にある「烏山頭^{うざんとう}ダム」にあるらしいということになり、実際にそのダムを見に行きたいと思うようになりました。



今年2月のある日、ついに休暇をとって台北に向かった小生は、そこで一泊した後、台南に向かいました。中国語が話せないのも、途中何度も、台湾の方達に身振り



穀倉 嘉南平野

「水の都」大阪から台南「烏山頭ダム」へ

手振りで尋ねながらの旅でしたが、台南駅前のバスターミナルから何とか路線バス（六甲行き）に乗り込むことに成功しました。約1時間バスに揺られ、ついにそのダムに到着しました。



珊瑚潭

その巨大なダムは、かつて日本の統治時代に石川県ご出身の日本人技師、八田與一^{はつたよいち}さんによって造られたもので、当時世界一の規模を誇るものだったようです。（1920年（大正9年）から10年かけて完成され、満水面積1000ha、有効貯水量1億5000万 m^3 。巨大なダム湖「珊瑚潭^{さんごたん}」は、上空から見ると、まるで珊瑚のように見えることから命名。）

広大な荒れ地であった嘉南平野は、それまで毎年のように干ばつや洪水に見舞われていましたが、このダムの完成により、台湾随一の穀倉地帯へと変貌したのです。



送水工

その功績もさることながら、八田與一技師は、「このダムの建設は地元の人々のためのものである」として、

そこで働く台湾人技師や労働者を日本人よりも優先して扱い、彼らに対する惜しみない愛情をもって建設にあたったと伝えられています。このことは、日本ではまだあまり広く知られていませんが、台湾では中学の教科書にも載っていて、ほとんどすべての台湾の人達が知っていることだったのです。

珊瑚潭の畔には、じっと佇む八田與一さんの座像がありました。この格好は、八田さんが生前様々なことを熟考する時の癖だったようです。戦後、日本関係の像や施設がことごとく破壊される中、この像は近くの村民が大切に隠し守って難を免れたとのことでした。



八田與一座像

そして、いまでも烏山頭ダムからは、嘉南平野一帯16,000 km^2 に渡って水路が細かく張り巡らされ、豊富な水が供給されていました。

東日本大震災にあたって、台湾から200億円もの義援金が届けられた背景に、この烏山頭ダムの建設にあたった八田與一技師への恩返しという意味があることを知り、そのダムを目の当たりにして、何とも言えない感動に浸りながら帰国の途につきました。

また、旅の途中、意思疎通に苦労したことの反省として、遅ればせながら、帰国後、NHKのラジオ「まいにち中国語」という中国語初級講座を聴くようになりました。

八田與一翁の功績を偲び、今後とも淀川水系のみならず、水資源機構の施設とともに、経済産業政策により日本経済のより一層の再生・発展に貢献したく、想いました。